対象	中学校３学年以上
教科	国語科
該当単元	中学３年 言葉２ 「慣用句・ことわざ・故事成語」
教科書	光村図書等
掲載日	2017.10.14.　朝刊　12版　28面 ～こころの好縁会の記事～ 玄侑宗久さんの基調講演から

僧侶・作家
玄侑宗久さん

こころの好縁会

相手がいてこそ 幸福感得られる

基調講演
玄侑さん

幸せ どう紡ぐ

鈴木先生がおっしゃる「幸せ」という言葉は、「神が祝福してくださる」という意味ですよね。私は、どうやったら幸せになれるかということを語源から考えてみたいと思います。

日本人は「しあわせ」という表現をずっと使ってきました。そこに「幸福」という文字を当てはめたのは、明治の初めのこと。奈良時代は「為合」と書いて「しあわせ」でした。当時、「那為」と書いて天変地異のことを言ってました。運命として受け入れていくしかないという意味で「為」を当て、「為合」と書いたのです。

それが室町時代になると「仕合」と書くようになります。この言葉は同時に「しあい」とも読みました。主語が「天」ではなく、「人」になる。あの人がこう来たんだから、自分はどう仕合わせられるか。うまく受け身をすることが「仕合」という言葉でした。

最近は目標を立てることが素晴らしいと思われがちですが、元々の日本人の幸福感はあくまで「仕合わせる」ですから、相手の出方が先にあるんですね。

日本人が好むことわざは反対の言葉に満ちています。「善は急げ」に対して「急がば回れ」。「うそつきは泥棒の始まり」と「うそも方便」、「立つ鳥跡を濁さず」と「旅の恥はかき捨て」、「二兎を追う者は一兎をも得ず」と「一石二鳥」。一本化せず、わざわざ逆の考えを膨らませてきました。

「しあわせる力」というのは、相手の出方にどう対応できるかという対応力のこと。それでお互いが上機嫌になります。対応するためには両極端を知っていて、中間のどこにでも着地できるというあり方が一番いい。そういうあり方を進めてきたのが、日本という国じゃないかと思うんです。

問１：日本人が使ってきた「しあわせ」という表現は時代によって使われた漢字が違うと玄侑さんは話されました。時代ごとに確認してみましょう。

奈良時代[　　]室町時代[　　]明治時代以降[　　]

問２：玄侑さんは明治以前の日本人の幸福感はどういうものだと言ってみえますか。

あくまで[　　]であるから、[　　]が先にある

問３：玄侑さんは「しあわせる力」とはどんな力だと言ってみえますか。

[　　]

発展：「日本人が好むことわざは反対の言葉に満ちている」例として挙げられたことわざを書き出しましょう。できれば自分でも一つ考えてみましょう。

	⟷	
	⟷	
	⟷	
	⟷	
	⟷	